



The White
Company
Way

社員がイキイキと喜んで働く「ホワイト企業」。そんな会社をつくるためには、経営者は何をすべきか——。ホワイト企業大賞企画委員長を務める天外伺朗氏が、社員の働きがいを重視するホワイト企業への道について語る。

社員が喜んで働く会社をつくる

天外^{てんがい}伺朗^{しろう}



昭和17年(1942年)、兵庫県生まれ。本名:土井利忠。元ソニー(株)上席常務。工学博士。ソニー勤務時代には、CDや犬型ロボットAIBOなどの開発を主導した。平成18年に同社を退職後、新企業経営論「人間性経営学」を樹立し、天外塾を主宰する。ホロボリック・ネットワーク代表。ホワイト企業大賞企画委員長。

ブラック企業の逆は——

平成二十六年七月、未来工業(株)の創業者・山田昭男^{やまだあきお}さんが逝去された。私は「天外塾」という経営塾を主宰しているが、二十三年から山田さんに講師をお願いして、三年にわたって毎年セミナー(月一回×三か月)を開催した。山田さんのユニークな経営哲学は、すでにマスコミやご本

人の著書を通じて広く知られていたが、実際にお話を伺うと「汲^くめども尽きず」という感があった。

その講義録と、私の解説や感想、塾生とのやり取りなどをまとめて『日本一労働時間が短い「超ホワイト企業」は利益率業界一! 山田昭男のリーダー学』(講談社)という本を二十六年四月に上梓^{じょうし}した。巻頭言を山田さんご自身に書いていただいたが、その一部を抜粋する。

——(前略)二〇一四年三月三日、福岡で開かれた未来塾で、私は初めて「ホワイト企業」という言葉を使って講演した。「社員をひどい目に遭^あわせるブラック企業ばかりの世の中だけでも、ウチはブラックの逆だなあ。それなら「ホワイト」だ。そこで「よそとの差別化」と「社員のやる気を起こすこと」ができていくのが未来工業は「ホワイト企業」と名乗ることにしました」と話した。すると天外さんは、この本のタイトルに早速、「超ホワイト企業」と入れることにしたと聞いて、機を

見るに敏なことだなあ、と思った。
(後略) —

山田さんは、社員に対して「お前たちはどうせ泥棒だろう」と言うなど口汚いところがあつたのだが、その実「社長の役割は社員を感動させることだ」という考えのもとに、社員を喜ばせ、やる気がわくように、ありとあらゆる知恵を傾けてこられた。そのマネジメントが未来工業のユニークさを支えてきた。

山田昭男さんの遺志を継ぐ

「ホワイト企業」という言葉は、それ以前にも誰かが使っていたかもしれないが、おそらく山田さんの造語。二十六年三月に最初に口にされ、翌月発行される本のタイトルに私が採用し、そしてその三か月後に山田さんは亡くなった。

ご本人が主宰の未来塾でも、天外塾でも、山田さんが情熱を持って語ったのは、日本中の企業に未来工業のような「ホワイト企業」になつてほしいという願いだった。



故・山田昭男氏
(提供=未来工業(株))

二十六年八月、FM東京で山田昭男さんの追悼番組があり、私がゲストで呼ばれた。番組の冒頭で「ブラック企業大賞」の紹介があり、それと対比して、山田さんがいかに社員の幸せに配慮をした経営をしてきたかが、熱く語られた。

私は「ブラック企業大賞」の存在

を、その時初めて知った。過去に大手外食企業や大手電力会社が受賞したという。でも、おそらく授賞式をやっても受賞企業は誰も出席しないだろう、ちょっと空しいな……と思った。

番組が終わるころ、私は山田昭雄さんの遺志を継いで「ホワイト企業大賞」を推進することを決心していた。第一回目は一般の募集をせず、企画委員会で相談をして、受賞企業を未来工業とネットヨタ南国の二社に決めた。

「ホワイト企業」は「社員の幸せ、働きがい、社会貢献を大切にする企業」という、とてもシンプルな定義にとどめた。定義を厳密、詳細にし、項目が多くなると、応募企業はそれにとられることになる。それよりも、「ホワイト企業」という概念が、自由に発展してほしいという願いを込めたのだ。

翌年一月十七日の表彰式に向かつて怒涛の如く準備が進んだ。

(次号に続く)